

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第

卷二十三第

行發日一月二年六和昭

論叢

不動產貸營業の地方間課税 法學博士 神戸 正雄
幕末に於ける幕府産物會所設立計畫について 經濟學博士 本庄榮治郎

時論

新地租方案を論ず 經濟學博士 沙見 三郎
率勢米價に就いて 經濟學士 蜷川 虎三

說苑

獨逸中工業金融機關との Industrieschaft 經濟學士 楠見 一正
米の銘柄別短期清算取引を評す 經濟學士 今西庄次郎

雜錄

消費組合による米の配給 經濟學士 谷口 吉彦
段別割の存在理由 經濟學士 安田 元七
支那經濟の衰退とその復興問題 經濟學士 大上 末廣
近江日野町志を讀みて 經濟學士 菅野和太郎

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題
本誌第二十一卷乃至第三十卷論題索引

昭和六年二月

經濟論叢

自第二十一卷
至第三十卷

論題索引

京都帝國大學經濟學會

一、本索引は經濟論叢第二十一卷乃至第三十卷におけるすべての論題を網羅す。

猶第一卷乃至第十卷の論題索引は大正九年七月經濟論叢第十一卷一號に在り。第十一卷乃至第二十卷の論題索引は大正十四年十一月經濟論叢第二十一卷五號に在り。

二、論題下に掲げたる數字は卷數と號數とを示す。例へば二十一ノ一とあるは第二十一卷一號の略稱なり。田島博士還曆祝賀記念論文集は第二十五卷四號に當る。

一、項目分類左の如し。

經濟學原理・經濟哲學……………	一	社會問題……………	五	財政一般……………	八
外國經濟思想史……………	一	交 通……………	五	租 稅……………	八
經濟史・日本……………	二	保 險……………	六	統計・統計學……………	一〇
經濟思想史……………	二	貨幣・信用・物價……………	六	移植民……………	一一
經濟政策一般・經濟事情・經濟地理……………	四	銀行・信託・金融……………	七	哲學・社會學……………	一二
原始産業……………	四	放資・景氣變動……………	七	國際問題……………	一二
商工業經濟……………	五	經營學・會計學……………	七	雜……………	一三

經濟學原理・經濟哲學

福井孝治	學と實踐	二七〇ノ三、四
橋本文雄	經濟法の概念	二七〇ノ一、二
石川興二	經濟學の根底をなす公益的精神に就て	二七〇ノ一
同	經濟學の一部門としての經濟學本質論の意義に就て	二七〇ノ四
同	經濟學史基礎論	二九〇ノ二
作田莊一	世界經濟の成立過程	二九〇ノ一、二、四
同	經濟學の四問題	二九〇ノ四
柴田敬	カツセル氏の『價格形成の機構』の吟味	二九〇ノ六
高森晋	カツセルの價值論廢止と價格問題の取扱	二九〇ノ四
同	需要弾力性の測定	二九〇ノ六
高田保馬	効用、價值及價格	二九〇ノ一
同	生産の概念	二九〇ノ二
同	價格の一理論	二九〇ノ五
同	分配論の性質	二九〇ノ五
同	利子の泉源について	二九〇ノ五
同	利潤成立の機構	二九〇ノ三
同	經濟靜態について	二九〇ノ一、二
同	價格の勢力説	二九〇ノ五
同	免償價值について	二九〇ノ六
同	勞銀の理論	二九〇ノ一、二
同	平均生産力説について	二九〇ノ五、六

同	國際價格の理論	二九〇ノ三
米田庄太郎	限界經濟學と制度經濟學	二九〇ノ二
同	經濟靜學と經濟動學	二九〇ノ三、四、五
同	限界經濟學	二九〇ノ一
同	數學的經濟學の概念	二九〇ノ三

外國經濟思想史

堀經夫	チャアルス・ホールの思想	二九〇ノ五、六
同	歴史學派の先驅者としてのリチャアド・ジョーンズ	二九〇ノ四
同	勞働價值論の通俗化	二九〇ノ四
同	リカアドの勞賃論	二九〇ノ三
石川興二	アダム・スミス「富國民論」の基本的考察	二九〇ノ六
同	アダム・スミス「富國民論」の研究對象並に方法の基本的考察	二九〇ノ一
河上肇	資本論第一版と第二版との相違	二九〇ノ三
同	マルクスの所謂社會的意識形態に就て	二九〇ノ一
同	再びマルクスの社會的意識形態に就て	二九〇ノ一
同	資本論の始點と終點との辯證法的統一	二九〇ノ四
河田嗣郎	マルクスの農業經濟觀	二九〇ノ六
同	マルクスの農業勞働者に関する見解	二九〇ノ一
菊田太郎	シュムペーターのシエモツラー觀	二九〇ノ五
松岡孝兒	パンタレオニ氏業績の回顧	二九〇ノ一
同	パンタレオニと經濟學基礎概念	二九〇ノ四

經濟史・日本經濟思想史

松岡孝兒	輓近フランス經濟學界の傾向	二九ノ一	上田藤十郎	スミスとリストの經濟發達階段說	二五ノ一
森耕二郎	リカアドに於ける勞働價值法則の妥當性に就いて	三二ノ二、三、四	平生釵三郎	日本に於ける海上保險の起源發達に就て	三三ノ三
同	アダム・スミスの勞賃論	三五ノ五	本庄榮治郎	近世農村の性質	三二ノ二
同	サミュエル・ベイリー	三三ノ六	同	近世農村問題の性質	三二ノ三
同	フイジオクラートの勞賃論と「純收入」	二四ノ一	同	近世の土地分給政策	三一ノ四
同	リカアド勞賃論とマルサス人口原則	二五ノ二	同	西陣の補助業に就て	三二ノ一
同	リカアドの勞働階級將來觀と功利主義哲學	二五ノ四	同	長野縣下に於ける地割の慣行	三二ノ六
岡崎文規	ジエームス・ミルと新マルサス主義	三一ノ一	同	貧富調節論	三三ノ一
田島錦治	商書周書に見はれたる政治經濟思想	二二ノ二	同	我國古代の財政と佛教	三三ノ二
同	「大學」に見はれたる經濟思想	二二ノ三	同	徳川幕府の財政について	三三ノ三
同	「中庸」に見はれたる經濟思想	二三ノ四	同	我國財政の變遷	三三ノ四
同	ブルゲン氏の諸社會主義評論	二四ノ二、三、四、五、六	同	信洲小布施の地割制度	三三ノ五
高田保馬	マルクス價值論の價值論	三ノ一	同	美濃名森村の地割制度	三三ノ六
八木芳之助	マルクスの絶對地代と價值法則	二二ノ一	同	武士階級の窮乏	二四ノ一
山口正太郎	重農學派の純收入論	二六ノ二	同	町人の財力と士農兩階級	二四ノ二
同	希臘現代の經濟學	二七ノ一	同	近世に於ける社會階級の變化	二五ノ四
同	重農學派の人口論	二七ノ五	同	明治維新の成否 <small>に關する</small> 維新當時の一觀察	二五ノ五
同	重農學派の自然法觀	二八ノ五	同	大名領地について	二五ノ六
同	チユルゴアの『富の形式と分配』	三ノ二	同	奥羽諸藩における赤子養育仕法	二六ノ一
山本勝市	フイジオクラートの價值論	二六ノ三、四	同	大阪の文化と造幣局	二七ノ四
米田庄太郎	ミルの經濟學概念	二四ノ四	同	佐田介石の舶來品排斥の思想と運動	二七ノ五
			同	明治初年大阪の御用金	二八ノ一

同	再び佐田介石に就いて	二九ノ一
同	津藩の均田策	二九ノ三
同	徳川幕府と紙幣の發行	三〇ノ一
堀江保藏	徳川時代の寺社名目金	二七ノ六
同	京都府に於ける士卒の歸農商に就て	二八ノ四
同	兩と圓との關係に就て	二八ノ六
同	經濟理論と經濟史	二九ノ二
同	舊會津藩士斗南士族の就産	二九ノ六
一谷藤一郎	英蘭銀行の成立及び發展過程に就て	二八ノ四、五
井 篁 弁	美濃稻津村小里の割山制度	二八ノ二
菅野和太郎	八日市の起源と歸化人	二五ノ三
同	近江商人の起源	二六ノ六
同	明治初年に於ける大阪通商會社	二七ノ四、五
同	明治初年に於ける大阪爲替會社	二八ノ二
同	大阪爲替會社の業務	二八ノ三
同	大阪爲替會社の業績	二八ノ四
同	近江商人の活躍について	二八ノ六
同	幕末の商社	二九ノ二
同	徳川時代の商人カルテル	二九ノ五
同	商人の漁業家化	三〇ノ五
吉川秀造	明治政府の貸附金	二九ノ四、五、六、三ノ二
菊田太郎	宗門人別改制度の沿革	二五ノ一
黒正 巖	徳川時代岡山江戸間の海運	二七ノ二

同	岡山藩と大阪との海運	二七ノ六
同	神社救貧制度の一例	二五ノ二
同	作州の農民騒動	二五ノ四
同	藩札の濫發と農民の疲弊	二五ノ五
同	岡山藩の税制	二五ノ六
同	羽州庄内農民愁訴騒動	二五ノ二
同	伊豫の百姓一揆	二五ノ五
同	領主擁護の百姓騒動	二五ノ六
同	徳川時代の農民逃散	二四ノ一
同	土佐の百姓一揆	二四ノ三
同	津輕藩の武士歸農策	二四ノ六
同	江州甲賀の大工仲間	二五ノ四
同	岡山藩の自營船廠	二五ノ五
同	專賣類似の仕法に基く百姓一揆	二六ノ一
同	徳川時代の漁民騒動	二六ノ二
同	幣制の紊亂に基く百姓一揆	二六ノ五
同	百姓一揆の發生季節	二七ノ二
同	明治初年の大阪の新工業	二六ノ一
同	美濃國騷擾史	二六ノ三
同	越前米浦の農民逃散	二九ノ三
同	四民平等令と百姓一揆	三〇ノ五
同	海上保險の發顯地に關する一異説	二五ノ五
近藤文二	草津宿に於ける助郷に就いて	二六ノ五
黒羽兵治郎		

松好貞夫	土佐藩に於ける武家の借滞作配	二七〇ノ二
三浦周行	江戸時代に於ける田島永代賣買の禁止に就て	二七〇ノ三
同	横濱及び神戸の開港事情	二七〇ノ三
同	足利時代の通商貿易	二七〇ノ六
同	古代の港	二七〇ノ四
同	中世の港	二七〇ノ五
同	近世の港	二七〇ノ二
同	近世貿易の趨勢	二七〇ノ五
同	我國に於ける生命保険業の首唱と其先驅	二七〇ノ四、五
中川與之助	妙心寺の無盡講	二七〇ノ四
同	妙心寺の寺領と領民の負擔	二七〇ノ五
大山敷太郎	助郷と農民の生活	二七〇ノ五、六
新村 出	八幡船考	二七〇ノ四
谷口吉彦	景氣變動と日本資本主義の發生	二七〇ノ四
同	景氣變動と日本資本主義の成立	二七〇ノ五
矢野仁一	徳川時代に於ける長崎の支那貿易	二七〇ノ五、六
同	長崎貿易に於ける銅及銀の支那輸出に就て	二七〇ノ一、二
同	貞享以後の長崎の支那貿易に就いて	二七〇ノ五、六
經濟政策一般・經濟事情・經濟地理		
藤田敬三	マツクス・ウエバーの政策論の根本概念について	二七〇ノ六
同	經濟政策學に於ける超越的目標に就て	二七〇ノ二
同	ヴァイルブランドの新しき經濟政策論	二七〇ノ五

井上準之助	我國の國際貸借と金解禁問題	二七〇ノ一
菊田太郎	地理的認識の性質について	二七〇ノ五
同	生産立地理論について	二七〇ノ六
森口繁治	經濟議會の一種としての獨逸國經濟委員會	二七〇ノ四
田島正雄	英領東アフリカの現状と其將來	二七〇ノ三
山室宗文	我國民經濟の實相	二七〇ノ一
大谷政敬	國民經濟と大都市經濟	二七〇ノ六
原始産業		
長谷川安次郎	長崎の機船底曳網漁業と金融情況	二七〇ノ四
平田憲夫	産業としての林業の本質	二七〇ノ四
同	産業としての林業の特性	二七〇ノ六
勝山勝司	國民的産業としての生糸	二七〇ノ六
河田嗣郎	米價と關稅との關係に就て	二七〇ノ一
同	勞働組合としての小作人組合	二七〇ノ六
同	米穀關稅と輸出地の米價	二七〇ノ一
同	自作農維持策としての地租免除	二七〇ノ四
同	ツエッコス共和國の土地制度改革	二七〇ノ一
同	伊太利に於ける農業社會化運動	二七〇ノ二
同	英國勞働黨の農政方針	二七〇ノ六
同	土地の非資本的性質に就て	二七〇ノ一
同	露西亞の新經濟政策と農業	二七〇ノ三
同	獨逸社會民主黨の農政綱領	二七〇ノ三
同	社會黨の農民獲得運動	二七〇ノ六、二七〇ノ二

同	自作農地の創設及維持	三六ノ一
同	臺灣の小作制度	三六ノ四、五、六
吉川秀造	農奴解放後に於ける露西亞の土地問題	三三ノ三
同	露西亞における農業改革とその効果	三三ノ六
岡本清造	禁漁制度について	二九ノ四、五
財部靜治	漁業についての一管見	二九ノ五
八木芳之助	農政上より見たる家産制度	三二ノ三
同	歐洲に於ける家産運動及び家産制度	三二ノ五、六
同	家産制度の利弊	三二ノ一
同	獨逸農業の現状	三九ノ四
同	北米合衆國の農業問題	三九ノ五
同	農家經濟の本質に關する一考察	三二ノ一
同	世界の食糧問題	三二ノ三
同	世界的農業恐慌に關する二見解	三二ノ六
山本美越乃	食料増殖問題と林業政策	二二ノ六
同	朝鮮産米増殖計畫と世論	三二ノ一
商工業經濟		
江頭恒治	伏見酒造労働に就いて	二七ノ六
本多芳郎	足袋の製造工程	二五ノ一、二
今西庄次郎	株式定期取引の限月復舊に就いて	二七ノ六
同	米穀取引所の統一	三二ノ五
今津正二	月賦信用の特質	三二ノ四

井上 潔	木綿工業經營の現状一斑	三二ノ四
谷口吉彦	商品堆積の理論	三二ノ一
同	商品の萌芽形態に於ける社會的性質	三二ノ一
同	商業の本質及商業經濟學に就て	三二ノ一
同	配給組織合理化と中央市場の單複制	三二ノ四
八木芳之助	英吉利の商工立國政策	三二ノ三
社會問題		
橋本文雄	我國の救護制度	三二ノ一
岩城忠一	最近の露國組合運動	三二ノ六
河田嗣郎	労働組合法案を評す	三二ノ四
同	労働組合主義と集合契約	三二ノ五
同	労働爭議調停法案に就て	三二ノ二
同	労働組合と月給取階級	三二ノ三
同	英國の總同盟罷業	三二ノ六
同	英國炭坑國有問題	三二ノ三
同	貸金局制度に就て	二五ノ四
芝 元一	艦船工場に於ける職工の生活	二九ノ三
末川 博	勞農露國における労働義務	三三ノ四
同	新經濟政策とロシア労働立法	三三ノ六
同	一九二二年のロシア労働法	三三ノ一
八木芳之助	露西亞の産業組合運動	三二ノ一
交 通		

北原信男	我國の鐵道資本について	三ノ五
小島昌太郎	運賃論より見たる繋船同盟と海運同盟	三二ノ二
同	海運に於ける表定運賃の特質	三三ノ一
同	海運同盟の排他的手段に對する北米合衆國の政策	三三ノ六
同	英吉利海運の統計的研究	三三ノ五
同	表定運賃論	三三ノ六
同	海運勞務の提供に要する原費	三四ノ一
同	英吉利の國際海運收入	三四ノ二
同	海運における運送原費と運賃との關係	三五ノ四
同	Fairplay 説の批評に應ず	三六ノ二
同	定期船事業における運送原費と運賃との關係	三六ノ三
同	定期船事業に於ける運賃の最低限度	三六ノ六
同	海運市場に就て	三七ノ二
同	海運に於ける運賃の最高限度	三七ノ三
同	老齡船の運用とその處分	三七ノ四
同	交通事業の經營主體	三六ノ一
同	交通事業に於ける競争	三六ノ五
同	運賃負擔力の表現としての容積と重量	三九ノ六
同	獨逸に於ける交通政策研究の現況	三九ノ二
前田稔端	大都市及其附近に於ける交通機關に就て	三九ノ二
種田虎雄	獨逸都市に於ける乗合自動車交通	三五ノ一
山口信男	定期飛行機の職能	三九ノ三

保 險

小島昌太郎	輸出信用保險制度創定の提案	三三ノ三
同	輸出信用保險について	三五ノ四
同	保險學の本質	三六ノ四
同	財産生命保險	三六ノ五、三六ノ三
同	保險と偶然	三七ノ一
同	保險に於ける偶然の必然化	三七ノ六
同	近藤文二 同盟罷業保險の現狀	三五ノ三
同	労働者家族所得保險について	三七ノ三
同	佛蘭西國營輸出信用保險	三六ノ六
同	我國に於ける家賃信用保險	三九ノ五

貨幣・信用・物價

有井 治	通貨主義とリカードの貨幣論	三六ノ三
福井孝治	計算貨幣と交換貨幣	三七ノ一
松岡孝兒	伊太利のリラ貨引上策について	三六ノ三
同	貨幣數量説への一考察	三七ノ二
同	フランスの新貨幣制度に就て	三六ノ四
同	中谷 實 銀行の信用膨脹に就て	三九ノ六
同	小川福太郎 インフレーションの意義并標準に就て	三九ノ一
同	大森研造 オレームの貨幣學說について	三五ノ四
同	柴田 敬 貨幣價值決定原理の一考察	三九ノ六

同	資本主義社會の機構に於る貨幣の地位	三六ノ一
島本 融	大戰中の佛蘭西の通貨	三七ノ一
同	最近の諸國幣制改革の傾向	三八ノ三、四
汐見三郎	國庫預金制度と兌換券發行高との關係	三九ノ一
高田保馬	貨幣數量説について	四〇ノ四、五
同	購買力平價説の一考察	四一ノ六
谷口吉彦	金利と物價との相關關係に就て	四二ノ五
銀行・信託・金融・放資・景氣變動		
有井 治	英蘭銀行の職能	四三ノ四
一谷藤一郎	投資トラストに關する一考察	四四ノ三
同	英國に於ける投資トラストの近況	四五ノ五
菊田太郎	長週期景氣循環に關する一研究	四六ノ三
楠見一正	獨逸の勞働者銀行	四七ノ三
同	銀行券の數量制限と正貨準備	四八ノ六
同	私營實業の概況	四九ノ四
同	獨逸信用組合の近狀	五〇ノ五
松本佳三	紐育倫敦兩資本市場の爭鬪	五一ノ二
松岡孝兒	合衆國における勞働銀行に就いて	五二ノ三
同	ベルギー國立銀行制度の改正	五三ノ三
同	イタリヤに於ける貯蓄銀行制度改正に就て	五四ノ五
同	ギリシヤの新發券銀行に就いて	五五ノ五
同	フランスに於ける庶民銀行に就て	五六ノ二

道上清治	一九二六年度の英國銀行界	五七ノ二
小川福太郎	手形交換制度の先驅としての里昂のペ イマン	五八ノ二
同	近世の恐慌と其一般的普及性	五九ノ五
同	預金通貨の造出に關する通説と新説	六〇ノ四
大塚一朗	產業界變動の豫測	六一ノ五
島本 融	所謂公開市場取引に就いて	六二ノ六
汐見三郎	獨逸帝國銀行の發券制度	六三ノ二
同	銀行法と普通銀行の資本金	六四ノ六
靜田 均	シュビイトホフの景氣循環論	六五ノ二
同	ポーレの恐慌理論	六六ノ四
水津彌吉	現今に於ける爲替相場の變動	六七ノ四
谷口吉彦	ヒルファディングの恐慌の意義に就て	六八ノ六
同	露國金融制度の變遷	六九ノ二
同	勞農露國に於ける金融制度の復活	七〇ノ五
同	英國勞働黨の銀行國有論	七一ノ二
同	リカアドウの恐慌論	七二ノ二
同	ワーゲマン教授の『景氣變動論』	七三ノ三
同	マルサスの恐慌論	七四ノ四、五、六
谷口吉彦	セイの販路説に就て	七五ノ一、二
和賀賢治郎	米國に於ける生命保險信託に就て	七六ノ二

經營學・會計學

星野周一郎	フオードの勞賃論	三五ノ二
同	フオード制とテイラー制	三五ノ三
磯部喜一	コンツェルンに就て	三六ノ四
同	英蘭新聞界のコンツェルン	三六ノ四
小島昌太郎	經營學の本質	三六ノ一
同	經營學の意義	三六ノ二
同	經營學と經濟學	三六ノ四
楠見一正	委任經理に就いて	三六ノ三、四
大塚一朗	合理化方法としての經營設備の改造	三六ノ四
同	英國の産業合理化	三六ノ六
同	豫算に依る企業の統制	三六ノ二、三
谷口吉彦	ドイツに於ける合理化運動の機關	三六ノ二
上野道輔	損益勘定に關する一考察	三六ノ二
同	混合勘定に關する一考察	三七ノ五

財政一般

有井 治	伊太利の財政經濟近況	三九ノ二
吉川秀造	勞農露國の豫算	三九ノ五
中川與之助	妙心寺の財政組織	三九ノ六
同	妙心寺派教團の共濟制度	三九ノ五
同	天臺宗團の財政	三九ノ一
同	我が國の地方費國庫補助制度	三九ノ六
同	中央・地方財政に於ける租稅配分	三九ノ六

同	米國の地方自治と財政	三七ノ二
同	普國に於ける小學校經費負擔の調節	三七ノ三
同	公有收益財産と地方財政	三七ノ六
同	中央と地方の豫算形式	三八ノ六
同	最近英國に於ける豫算の業績	三九ノ一
同	「獨立財源」の意義に就て	三九ノ四
同	獨逸に於ける Finanzausgleich の理論	三九ノ五
小山田小七	市町村の混合企業に就て	三九ノ六
同	我國の經費増加と物價の變動	三九ノ三
汐見三郎	總計豫算と純計豫算	三九ノ四
同	我國財政の季節的變動	三九ノ一
同	教育費負擔と地租委讓	三九ノ四
同	戰前戰後の歐洲財政	三九ノ五
同	獨逸都市の財政統計	三七ノ一
同	獨逸國の臨時部會計	三七ノ三
同	東京市財政十年計畫	三六ノ三
武田長太郎	佛蘭西の地方財政	三六ノ五
安田元七	地方費に對する國庫補助	三六ノ三

租 稅

羽根盛一	女給稅に就て	三九ノ三
神戸正雄	國債利子及官吏俸給の免稅	三九ノ一
同	公益上の免稅	三九ノ二

同	無收益財産の課税	三五ノ三	同	營業税の課税標準	三五ノ二
同	整稅案の一缺點としての負債利子の問題	三五ノ四	同	營業税の課税物件の地方分別難	三五ノ三
同	租稅公正の實現難	三五ノ五	同	農業税論	三五ノ四
同	財産税に於ける都鄙の對立	三五ノ六	同	租稅に於ける家計	三五ノ五
同	重複課税の本質	三五ノ一	同	租稅道義	三五ノ六
同	國際課税の主義論争	三五ノ二	同	法人に關する重複課税の問題	三六ノ一
同	國際營業の課税	三五ノ三	同	法人重複課税立法の分析	三六ノ二
同	國際課税に於ける人及び證券の所在	三五ノ四	同	相續税の遁脱	三六ノ三
同	交通税及消費税における重複課税	三五ノ五	同	相續税の補完としての贈與課税	三六ノ四
同	資本利子税の缺點	三五ノ六	同	動的資本と租稅公正難	三六ノ五
同	資本利子税と地方附加税	三五ノ一	同	租稅に於ける強者の專横	三六ノ六
同	地方家屋税の當否	三五ノ二	同	目的税論	三七ノ一
同	消費税に於ける砂糖税の地位	三五ノ三	同	租稅分類の一案	三七ノ二
同	不在者課税論	三五ノ四	同	租稅組合論	三七ノ三
同	消費税の理想としての專賣	三五ノ五	同	財産より生ずる無形所得の課税	三七ノ四
同	家屋税の本質	三五ノ六	同	勤勞所得に對する課税	三七ノ五
同	租稅の目的と實體	三五ノ一	同	自動車税論	三七ノ六
同	印紙税廢止論	三五ノ二	同	營利の事業に屬せざる一時の所得	三八ノ一
同	廣告税論	三五ノ三	同	大稅論	三八ノ二
同	俱樂部税論	三五ノ四	同	電氣税論	三八ノ三
同	勤勉獎勵目的の課税	三五ノ五	同	醫師と營業課税	三八ノ四
同	所得申告遺漏の補完方法	三五ノ六	同	地方税に於ける累進課税	三八ノ五
同	公益團體の課税	三五ノ一	同	戸數割の性質	三八ノ六

神戸正雄	消費税の目的及物體	三九ノ一	同	租税收入の季節的變動	三三ノ五
同	清涼飲料税論	三九ノ二	同	間接消費税の累進税率	三三ノ二
同	相續税の弱點	三九ノ三	同	酒税の轉嫁を論ず	三五ノ三
同	百貨店税論	三九ノ四	同	流通過程に於ける酒税の轉嫁	三五ノ四
同	營業税に於ける累進課税	三九ノ五	同	精神労働者と獨逸所得税法	三五ノ一
同	地租に於ける累進	三九ノ六	同	地方財政と累進税比例税	三五ノ三
同	所得税に於ける累進率	三九ノ一	同	獨逸の租税收入	三五ノ六
同	國税地租の課税標準	三九ノ二	同	營業收益税の改正法案	三六ノ二
同	資本金子税及第二種所得税に對する	三九ノ三	同	營業税と營業收益税	三六ノ三
同	地方附加税の禁止規定	三九ノ四	同	財政以外の課税目的	三七ノ二
同	家屋税の課税標準	三九ノ五	同	租税負擔及び經費の國際比較	三七ノ四、五
同	地租改正案に於ける若干問題	三九ノ六	同	地租の改正を論ず	三九ノ四
同	給料税(所得税に於ける給料の源泉課税としての)論	三九ノ六	同	新地租法案の税率	三九ノ五
村川達三	チエコスロヴァキアに於ける生計調査に基く租税負擔	三九ノ六	同	六大都市特に大阪市の租税負擔	三九ノ一
中川與之助	獨逸に於ける中央地方税の發達	三九ノ二	同	酒税の立替	三九ノ四
同	目的税と考慮税	三九ノ五	同	株式配當金の源泉課税	三九ノ六
同	租税負擔の地方比較と人口割法	三九ノ六	同	プロイセンの地方税制	三九ノ一
同	資本金子税の客體に就て	三九ノ四	同	地方税不動産取得税	三九ノ六
小山田小七	物價の變動と從量税	三九ノ二	山口正太郎	ケネーの租税理論	三九ノ一
汐見三郎	間接税負擔の地方別研究	三九ノ三			
同	生計調査より觀たる租税負擔	三九ノ五			
同	清酒庫出税と租税の立替	三九ノ一			
同	單一税の實現性	三九ノ二			
			井筒 弁	繁榮指數と社會の繁榮	三七ノ六
			有井 治	經濟統計に關する國際條約に就て	三九ノ四

統計・統計學

菊田太郎	失業と物價の變動	三三ノ三
同	比較性なき統計的計數	三三ノ五
同	國際統計協會と國際聯盟	三六ノ四
木村喜一郎	動大量と靜大量	三九ノ一
同	物價指數に關する一論	三九ノ三
益田熊雄	株價指數に就いて	三九ノ六
同	社會階級の交替性	三九ノ三
同	相關係數の意義	三九ノ四
同	中位數の本質	三九ノ六
中川與之助	獨逸の宗教統計	三九ノ六
蜷川虎三	實際賃銀と其測定	三九ノ四
同	物價指數の意味	三九ノ二
同	日銀指數利用の一指標	三九ノ三
同	指數の形式と指數の目的	三九ノ五
同	經濟統計論の性質に關する一考察	三九ノ四
同	統計學に於ける二つの傾向に就いて	三九ノ四
同	所謂『經濟統計學』に就て	三九ノ五
岡崎文規	我國最近の死産に就て	三九ノ三
同	都鄙別による離婚率	三九ノ四
同	獨逸に於ける犯罪統計	三九ノ五
同	造船船工場に於ける公傷率	三九ノ三
同	統計に於ける二重計算	三九ノ六
汐見三郎	指數の研究	三九ノ六

同	我國の國富及び國民所得を論ず	二六ノ二
同	國民所得に就いて	二八ノ五
財部靜治	自殺統計論	三二ノ一、二、四
同	統計拾穗抄	三二ノ一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇
同	統計による因果關係の研究	三三ノ三
同	家族統計概論	三四ノ一
同	統計の誤謬について	三五ノ四
同	武田長太郎	三七ノ四
同	大阪市の人口増加に就て	三八ノ六
同	大阪市の人口動態	三八ノ六
山本美越乃	再び我國の人口問題に就て	三九ノ五
移植民		
金持一郎	國際移民統計	三九ノ三
長田三郎	スミスの植民地論について矢内原教授の教を乞ふ	三九ノ五
同	スミスの植民地論につき矢内原教授に答ふ	三九ノ三
同	植民及び植民地の意義	三九ノ三、三
山本美越乃	矢内原教授の「アダム・スミスの植民地論」を讀みて	三九ノ四
同	スミスの植民地觀に關して再び矢内原教授に應ふ	三九ノ三、三
同	誤れる植民政策の畸形兒・琉球	三九ノ一
同	琉球の史的回顧	三九ノ二

山本美越乃	琉球の慶長役以前	三五ノ四
同	琉球と慶長役	二五ノ一
同	琉球の慶長役以後	二五ノ二
同	琉球最後の王朝とペルリ提督	二五ノ三
同	琉球の廢藩置縣	二五ノ四
同	琉球の廢藩と日支兩屬關係の終末	二五ノ五
同	移民政策の基準	二五ノ六
同	琉球の廢藩後に於ける治制	二五ノ七
同	琉球の天然資源と人	二五ノ八

哲學・社會學

作田莊一	純粹國家	二五ノ五
同	國家と社會	二五ノ六
同	國家の組織	二五ノ七
同	純粹國家	二五ノ八
恒藤 恭	文化現象の凝集作用	三五ノ二、三五、六
同	文化現象の地理的認識	二五ノ四
同	型について	二六ノ一
米田庄太郎	フツサールの現象學	二五ノ四、五、六
同	純正現象學の方法論及び問題論	二五ノ二
同	理性と現實	二五ノ三
同	ミルの社會學概念	二五ノ三
同	ロツシヤとヘーゲル哲學	二五ノ五

同	ミルのエソロデー論	二五ノ一
同	意味現實態	二五ノ二
同	ハイデッガーの關心論の基礎	二五ノ四
同	普遍化了解科學	二五ノ五
同	ハイデッガーの關心論	二六ノ一
同	一般社會學の概念	二七ノ一
同	特殊社會學概念の批判	二七ノ二
同	特殊社會學概念の批判	二七ノ三
同	ジムメル社會學概念批判	二七ノ四
同	形式社會學概念	二七ノ四
同	包括社會學概念批判	二八ノ一
同	總合社會學概念	二八ノ三、三

國際問題

作田莊一	支那の排外運動に對する根本方策	二九ノ三
櫻木俊一	上海の社會狀態	二九ノ三
汐見三郎	國際經濟會議	三五ノ二
末廣重雄	關稅特別會議に就て	二九ノ五
同	關稅特別會議に就て	二九ノ五
同	軍備縮小會議に就いて	二五ノ二
同	日支通商航海條約改正について	二五ノ一
同	支那問題管見	二五ノ三
同	海軍制限に關する米國の提議	二五ノ四
同	上海中立に關する一考察	二五ノ一
同	日支通商條約廢棄について	二七ノ三

矢野仁一	南京條約以前の治外法權問題に就て	三三ノ三、四
同	支那に於ける鴉片問題の起因を論ず	三三ノ五
同	日本の對支好意政策の限界	三四ノ四
同	支那の國民主義革命の成敗に關する 歴史的批判	三六ノ五

雜

上田藤十郎	フォン・ペロウ教授を憶ふ	三七ノ一
本庄榮治郎	京都帝國大學經濟學部紀要の刊行	三三ノ四
菅野和太郎	近江愛智郡志を讀みて	三三ノ二
川村多實二	人間愛の起源	三三ノ五、六
同	動物界の食糧問題	三三ノ四
同	動物界の鬭爭	三三ノ二
同	生物の美的進化	三三ノ二
同	動物界の道德	三六ノ一
黒正 巖	工業分布論に關する文獻	三五ノ一
同	聚落に關する三新著	三五ノ六
菊田太郎	クナツプ教授逝く	三五ノ二
蜷川虎三	エツヂウアース教授逝く	三五ノ五
作田莊一	徵兵制度反對宣言に就て	三五ノ四
汐見三郎	マイヤー文庫	三九ノ三
財部靜治	世事蘆隨觀	三三ノ六
委員	京都帝國大學經濟學會大會記事	三二ノ一、三三ノ一、三五ノ一

法 令

近着外國雜誌主要論題

三二ノ二、三、五、六
三三ノ二、五、六
三三ノ一、二、三、四、五、六
三四ノ二、五、六
三五ノ一、三、六
三六ノ二、四
三七ノ二、三、四、六
三八ノ五、六
三九、三、各號冊尾